



「笹川杯作文コンクール 2009」～中国語で応募～ 第2回優秀賞作品

※原文に忠実に和訳しました。

「私の清貧思想」

天津市 陳猛

生活はこんなにも豊かなのに、益々単調に感じるようになってきた。毎日、飛び回るほど忙しくしているというのに、心にはかつての活力や情熱がなくなってしまう。これ程長い間追い求めてきたのに、新鮮な感動はほとんど感じられない。これ程多くのものを手にしながら、なぜ、日に日に幸福感が失われていくのか… かつて、一連のこうした考えに囚われていた時、『清貧の思想』にめぐり合うことができた。

日本の作家、中野孝次が著した本である。発表されるや、物質至上主義の日本において一大ブームを巻き起こし、何ヶ月もベストセラーランキングに君臨し、3年もの長きに亘ってランキングに登場していた。

この本は伝統文化、人生哲学に関するものである。日本史上の人物15人の独特な生活方式を通じて日本文化の一面、つまり、自身の精神世界を重視するということを詳細に描き出している。ちょうど中野孝次が世界を巡って講演していた時に話したように、「日本は、世界に知られているようなモノ作りに溺れ、カネを崇拜し、現実の富と栄華を追い求めている面ばかりではない。」日本が最も誇るべくは、歴史上の人物が発する“清貧さ”なのである。

史上の各人物の思想は歴史の枠を通り抜け、現代人に対しても変わることもない力を持っている。彼らの共通点は、生活がきわめて質素であり、物欲のしがらみに囚われることなく、心が平和で自由な境地を泳いでいることである。いわゆる“清貧”とは、決して貧困ではない。有り余る物欲を自ら放棄し、簡素な暮らしの中から心の豊かさと充実を体験し、広々とした精神空間を追い求めることである。そして文中にもある様に、「足るを知れば、貧しさも富と呼べる。財があって欲が多ければ、それは貧しいと言う。」

私は何度もこの本を読み、多くの文を暗唱することができる。また、長く深い思考も喚起された。なぜ、裕福な日本人がこの本を好み、“清貧”に惚れ込んだのだろうか？

無限の物質的な豊かさと自負心が、日本人に拝金と唯物の道を歩ませ、精神世界の追求を無視した人々は利己的で冷たく、前途が覚束ないものとなった。周知のとおり、日本では過労死や自殺が頻発し、人々は危機感の中、安全感を感じる事ができない状態にある。このため、作者は、物質的な豊かさと文明の発達は必ずしも人を幸福にできるとは限らないと考えた。そして、人が持つ心の二重を無視することで、人が別モノになってしまった。人はもはや本来の意味における人ではなくなり、“消費者”と化したのである。日本人も大方そここのところを痛感したからこそ、『清貧の思想』が流行ったのだろう。

そして、見出しには「袋には米が、竈には柴がある。他に何が要るものか」、「六尺の草庵、静かで恐れがない」、「青々とした若葉ほど尊いものはない」…どれも痛切で、よく分かる！中国の伝統文化にある「一簞の食、一瓢の飲、陋巷に在り」や「東籬下に菊を採り、悠然と南山を見る」を思い出さないだろうか？これが“清貧”の古い記録、そして実践の手本なのである！だから、作者も文中で中国文化に触れたが、私達は二国間の文化の根源での関係を明確にさせないと、祖先に対して顔向けができない。

“清貧の思想”は静かな心から生まれる。欲望の享受と向き合えば、いくら煩雑な中であっても、自我を持ち、世界を静かなものにできる。

覚えておくべきことは、持つモノが多くなるほど、空間は小さくなり、容量が小さくなるということだけである。つまり、あれやこれやの収穫の喜びを味わえなくなるのである。逆に、多くのモノを持たなければ、大きな空間があり、自分の両手で人生最大の楽しみの一つをつかむこともできるのである。

私は、中野孝次の『清貧の思想』を手放せない。素朴な生活を選択する助けにもなる。私は、事業や理想に対して心を平和に保つことを既に学び取ったのである。物欲もほぼ最低限になったようである。清貧で静かな生活を送り、毎日の日の出と日の入りを眺め、世界の喧噪を耳にする人になりたい。